

「そんなわけでやってきました、ポルニーランド!どれ乗るとれ乗る!？」  
 緑の髪をした小柄な少女、南スピカが大はしゃぎで僕らを先導する。

この前のお礼がしたいということで、郊外に新しく出来た遊園地に連れてこられたが……まさか『彼女』も来ていたとは。正義のヒロインであり、同級生でもある紅髪の美少女、夕凧ころな。僕が先日怪人に乗っ取られて襲ってしまったから、非常に気まずいのだ。夕凧も僕が来ることを聞いてなかったのか、気まずそうな顔で南を呼び出す。

「ちよつと……スピカちゃん、なんで星野君が……」

「んふふふふ、とほげちやつて。」

「……なんのこと？」

「放課後の屋上で何を話してたのかな、このこのお。」

「……!そ、そんなんじゃないってば!」





「二人とも仲いいね。あ、星野くん、この間はありがとうございました！」

「ああいいよ、そんなにかしこまらなくても。」

「プロンドの少女海野みお。おっとりしたかわいい子だ。」

魅力的な女子達との遊園地。折角誘ってもらったのに、彼女たちにつまらない思い出を残すわけにはいかない…。まずは夕凧との関係を修復しなければ。早速戻ってきた彼女に話しかける。

「ゆ、夕凧さんも来てたんだ。あはは、久しぶり。」

「ひ、久しぶり、星野くん…。」

…きこちないが、これから挽回していくしかない。

南がまず選んだのは観覧車だった。

「さてと、私とみおちゃんは一緒に乗るからごゆっくり。」

「え、ちよっと待てよ、みんなで乗れば…」

「早く早く、後ろつかえてるんだから！」

僕と夕凧は、半ば強引に観覧車に詰め込まれた。

「…」

狭い空間は長い沈黙に包まれていた。観覧車はもう随分高いところまで昇っている。

『プロミネンス』について、聞きたいことは山ほどあるが、重要なことだろうし…。この前のことを謝りたいけど、掘り返さないほうがいいのかも…。あれこれ考えたが、沈黙を破ったのは彼女だった。





「怪我、もう大丈夫?」

「ああ、うん。平気平気!」

「よかった…。」

「…この間はごめん!謝って済むことじゃないけど…」

「…いいよ。悪いのは星野くんじゃないから。」

彼女はあんなに酷いことをした僕を心配してくれていた。何とか今日は、彼女を楽しませてあげたい。

「…あつー夕凧は、ジェットコースターとか好きう次は皆であれに乗らない?」

「別にいいけど…。」

何気ない会話が続く。まだ少しぎこちないが、何とか少し打ち解けてきたようだ。

もう残り4分の1周というところで園内を見下ろすと、何やら騒ぎが起きているようだった。ピンク色の煙が立ち昇っている。

「なんたるアレ、イベントでもやってるのかな。」

彼女の表情が一変する。

「違う……！」

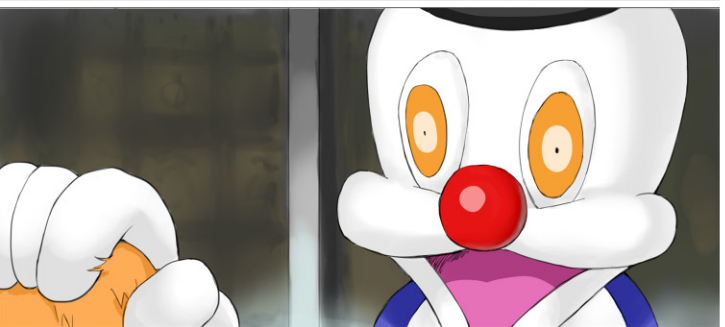
「まさか、怪人！うこんな所で……！」

「ごめん、私行かなきゃ。」

「あっ、夕凧！」

彼女は変身と同時に観覧車から飛び降りた。





「うわああーん！」

泣いている幼女の傍に立っているのは遊園地の支配人・ホルニーであった。

「う、うわああー！ミキちゃああん！」

「ボクちゃんの遊園地を楽しいめない大人は子供にしちゃうよーん。お前も…」

「そこまでよ。」

「んあ？おまえはプロミネンスうー。ボクちゃんの邪魔してきたの？」

「その人を元に戻しなさい。」

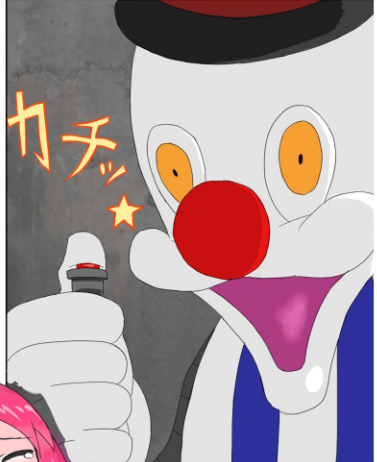
プロミネンスはブレードを装着した。

「遊園地で暴れるなんて無粋だなあ。」

ブレードを見たピエロは一目散に逃げ出した。

「…！待て！」

プロミネンスは後を追う。



「ヒー、ヒー…んもう、しつこいなあ。」

プロミネンスは怪人を追い詰めた。怪人は疲れているようだが、表情の変化を全く見せない。

「さっきの人を元に戻さない。」

「ふふふん、どうしようかなあ。」

追い詰めても反省の色が見られないピエロに、プロミネンスはブレードを構える。

「…これ以上被害が出る前に、今からあなたを倒します。」

怪人とじりじり距離を詰めていく

「あ、あわわわわ…どーしよ、どーしよ…」

近づくほど焦った声を出すピエロ。しかし…

「ボチツとな。」

突如隠し持っていたスイッチを押すと、丁度プロミネンスの立っている床が発光する。  
「うー！」

危険を察知したプロミネンスであったが時はすでに遅く、後ろに跳躍する前に、その身に強力な電流が流れる。

「うーきゃああああっ……！」

身体を抑えるが、電流は容赦なく流れる。

「ああっ……！あんっ……！あはあああっ……！」

床から離れようにも体が硬直し動かない。このままでは気を失うまで流されてしま  
う。

「イイソ〜悶える悶える〜」





「よ、よせ……ああっ、いやあああっ……！」  
苦痛に喘ぐプロミネンスにピエロは放電スイッチを手放せない。さらに深く押し、電圧を高める。

「い、いやん、あはあああっ……！」

より強力な電流が、プロミネンスの全身を内側から逆撫でる。プロミネンスが身体を抑え、腰をくねらせながら身をよじり、悶える様は妙に官能的で、ピエロの嗜虐心はさらに煽られる。

「うひひ、いいね〜ほれ最高出力だ！イっちゃえ〜！」

「ああっ、あんっ、あああああ——っ……！」

プロミネンスは甲高い悲鳴を上げ、長時間の電流に果てた。





プロミネンスが次に目を覚ますと、馬の人形に跨っていた。

「ようこそ、閃光戦士プロミネンス。ホクちゃんの裏、遊園地へ。」

「……は……？」

陽気だが、どこか不気味な装飾に、馬の模型……ここはメリーゴーラウンドのようだ。しかし床には針が隙間無く並んでおり、プロミネンスは青さめる。どうやらここは怪人の作り出した世界のようなのだ。

「さて、準備はいいかな？ それじゃあスタート！」

「えっ……きゃっ……！」

陽気な音楽と共にメリーゴーラウンドが回りだす。馬もゆつさゆつさと揺り出す。

「くっ……！ 一体何を……！」

「ふふふ、ここは遊園地だよ？ これからゲームで勝負してもらおうよん。お前が3回勝てば子供にした奴らも戻してやるし、このテーマパークからも消えてやるよん。ただし負けた場合……「バツゲーム」を受けてもらうよん。」

怪人の世界なので勝負中に何を仕掛けられるかわかったものではない。しかし一般人の安否が懸かっている以上、従うしかない。

車輪付きの椅子に拘束されたプロミネンス。次のゲームは「ホラーコースター」。ゴールしたら勝ちという単純なルールだが、途中の仕掛けに声を上げたら『ペナルティ』が科され、椅子が後退しゴールまで遠ざかる。ホラーが苦手なころなほ不安になるが、正義の戦士として怪人との勝負に逃げるわけにはいかない。少し進んだところで突如、真上から蛇や蛙が吊るされる。

つ……!

生理的嫌悪感に声を上げそうになるが、何とか押し殺す。

少し進むと、今度はゾンビが上から驚かす。

ツツ……!

次は頬にぬるん、とした物体が触れる。

(……な、何……?)

暗闇の中、ぬるぬるした感触が頬を撫で、つい声を上げてしまいそうになる。

「ウヒヒ……、これは効果的みたいだねっ。」

ぬるん。ところなの頬にまた触れる。

「ツツ……!」



次に目が醒めたときには両手を拘束され、不気味な人形たちの上で寝ていた。

「く……こ……は……?」

ガラスの向こうには怪人に拘束されたと思わしき一般人たちの姿。なぜか男しかないようだ。

「どういふことだ……?プロミネンスが景品に……」それよりこ……こなんだよ……」

男たちはさわめくが、ピエロのアナウンスが入り静まる。

「三回戦目はお前らに協力してもらおうよ……ん。制限時間内はこのピエロ キャッチャーでプロミネンスを取れば勝ちだよ……ん。それじゃあがんばってね……ん。」

アームにも意志があるらしく、突然喋りだす。

「よろしくな。プロミネンス。俺のウテは弱めに設定してあるから、あんまり動かないほうがいいゾ……」

今回は市民との協力が試されるようだ。プロミネンスはガラス越しに声をかける

「み、皆さん、お願いします。私でもできるだけ動かないよう頑張りますから。」

「あ、ああー待っててくれよ、プロミネンス！」

